「医は仁術」母国で実践

高給よりバングラのため

留学生3人

九大・東大・琉球大

「自分たちの国は、自分たちの力で良くしていかなくてはならない」―この春九大医学部大学院麻酔科を卒業するジュナイド・シャフィックさん(三)ら三人のバングラデシュ人留学生が、力を合わせて今夏、首都ダッカで「ジャパン―バングラデシュ・フレンドシップ病院」(三十床)を開院することになった。留学生のほとんどが外国で就職してしまうバングラデシュでは初めてのケース。「日本国で学んだ〝医は仁術〟ということを実践するのは貧しい母国しかない」と三年前、三人で決めた約束を実現する。

病院を開くのは、ジュナイドさんと、東大医学部第二外科のサルダール・ナイムさん(三)、琉球大医学部外科のファイサール・ムアザムさん(三)。

昨年十月、大使館を通じてバングラデシュ政府から開院許可が下り、病院の施設を無償で提供してくれることになった。三月末に帰国、さっそく開院準備に取り掛かる。「貧しい人たちのために、初めは週一日を無料に、軌道に乗ればベッドの半分は無料にしたい」とジュナイドさんは夢を語る。

帰国後、病院開設へ

「機器足りぬ」 提供呼びかけ

バングラデシュから日本に医学生として留学、今春卒業するのは約十人。しかし、三人以外のほとんどは、給料が高い日本やアメリカなどで就職するという。

三月に三人が帰国するまでの最大の課題は、治療のための機材の調達。三人のために、東京では、民間から無償提供のベッド三十台をすでに現地に輸送、福岡県内の個人病院なども機器提供を申し出ている。が、三人の技術を十分に生かして治療を行うには機器はまだ足りない。

ジュナイドさんや支援者らは、不用になったCTスキャナー、麻酔器、手術用機材、滅菌器など約四十九種類の提供を呼び掛けている。機器提供の連絡先は＝092（641）1151内線2613＝九大医学部麻酔科。

自国に病院を開くバングラデシュの九大留学生ジュナイド・シャフィックさん